

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370314

研究課題名(和文) エズラ・パウンドの「高利」批判とアメリカ建国の父祖 儒教、ファシズムとの「符合」

研究課題名(英文) Ezra Pound's Criticism of "Usury" and the American Founding Fathers: "Tallying" with Confucianism and Fascism

研究代表者

長畑 明利 (Nagahata, Akitoshi)

名古屋大学・人文学研究科・教授

研究者番号：90208041

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、エズラ・パウンドの詩と詩論に見出される「アメリカ建国の父祖たち」の評価の意味を、彼の「高利」批判との関連から明らかにし、また彼らを儒教およびファシズムに結びつけようとする試みを、「割符」の比喻で示しうる彼の創作原理の変化と関連づけて考察することを目的とした。研究の結果、パウンドのジェファソン、アダムズ評価が彼の「高利」批判と連動すること、彼の儒教評価とファシズム賛美は彼のジェファソン、アダムズ評価とも関連すること、彼が言及する儒教由来の「割符」の比喻が、これらの関連づけを、また、同時期に顕著になる『詩篇』の創作原理「表意文字的手法」の変化を説明するのに有益であることを確認した。

研究成果の概要(英文)：The purposes of this research were to clarify the meanings of Pound's evaluation of the "American Founding Fathers" in the light of his criticism of "Usury," and consider his attempt to relate them with Confucianism and Fascism, as well as the change in his compositional style that occurs in his later Cantos, in terms of the concept "the tally" borrowed from Mencius. As a result of the research, it has been shown that Pound's evaluation of the "Founding Fathers," especially, Thomas Jefferson and John Adams, is linked to his criticism of "Usury," that it is also related to his praise for Confucianism and Fascism, and that the metaphor of "the tally" can help explain his attempt to relate the "Founding Fathers" with Confucianism and Fascism, as well as the change in the nature of his "Ideogrammic Method" in his later Cantos.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：パウンド ジェファソン アダムズ 符号 儒教 ファシズム

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者はこれまで、20世紀前半に活躍したアメリカのモダニズム詩人と「抽象」の関係を検証する研究を進めてきた。2005年度までに、Gertrude Stein、Wallace Stevens、Hart Crane、T. S. Eliotに見られる抽象観について考察し、2006～07年度には、Ezra Poundの能体験が彼の「漢字的抽象」の発展型である「表意文字的手法」の生成に果たした役割について、2008～2010年度には、パウンドの儒教受容とファシズムへの傾倒と「表意文字的手法」の変化について、2011～2013年度には彼の経済学的関心と創作スタイルの関係について考察した。本研究は、これらの研究をさらに発展させるものとして構想された。

(2) 本研究が対象とした主たる問題領域は次の通りである。

パウンドの「アメリカ建国の父祖」たちへの関心

パウンドは1920年代以後、しばしばジェファソンとアダムズを中心とする「アメリカ建国の父祖」たちを題材として、自身の社会論・経済論を展開するようになる。彼は1924年からアメリカ史を集中的に学び直し、その成果を1934年出版の *Eleven New Cantos* に収録された Jefferson Cantos 及びその他の詩篇として発表し、さらにアダムズについての研究を進めて、Adams Cantos を執筆した(40年の *Cantos LII-LXXI* に収録)。これらに加え、35年には評論 *Jefferson and/or Mussolini* を、37年には“The Jefferson-Adams Letters as a Shrine and a Monument”を發表し、38年の *Guide to Kulchur* にも“Decline of the Adamses”のセクションを書いている。同じく38年には、アメリカ史において学ぶべきテキスト紹介のための導入として“Introductory Textbook”を發表し、リンカーン、ワシントンと並んで、アダムズとジェファソンの言葉を引いている。

ジェファソン、アダムズらを扱ったこれらの詩作品や散文において、パウンドがとりわけ注目するのは、彼らの経済、とりわけ「利子」に関する態度である。例えば、38年の“Introductory Textbook”に引用されたアダムズの言葉は「貨幣と信用と流通の本質についての無知」についての警告であり、ジェファソンの言葉は利子への警戒を説くものである。35年の *Jefferson and/or Mussolini* においても、ジェファソンの利子についての考察はその中心的主題とされている。パウンドは、アメリカ建国期の政治家二人が示した利子や貨幣に対する慎重な態度を評価し、金融資本の影響によって、それが徐々に失われたことを告発しているのである。その姿勢は、*Eleven New Cantos* や *Adams Cantos* においても確認することができる。

パウンドの「アメリカ建国の父祖」たちへの関心と彼の儒教、ファシズムへの傾倒との関連性

ジェファソンとアダムズを中心とするこ

うした「アメリカ建国の父祖」たちの扱いは、30年代に顕著になるパウンドの儒教への傾倒と、また、ムッソリーニおよび彼のファシズム支持と重なるものである。パウンドは、制度を悪用して巨額の利子収益を得る金融資本家もしくは金融組織を、国の財政の困難さらには、度重なる戦争の原因とみなし、こうした無から利潤を生み出す行為を「強欲」一般と結びつけて、“Usury”(高利)の言葉で糾弾した。パウンドの儒教道徳への傾倒と、ムッソリーニおよびファシズムの支持は、国や社会を蝕む金融資本の「高利」追究を根本から阻止するための、道徳および政治体制の希求の現れと解することができる。パウンドのジェファソンとアダムズの評価も、「高利」を批判し、それを抑制しようとしたことに基づくものであり、それゆえパウンドはしばしば「アメリカ建国の父祖」たちへの言及を、儒教およびファシズムへの言及と並べている。*Cantos LII-LXXI* が、前半に Chinese History Cantos を、後半に Adams Cantos を置く構成を持つこと、*Jefferson and/or Mussolini* が二人の政治家を連結させようとする試みであることはその顕著な例である。

「割符」イメージの観点に基づく「表意文字的手法」の再検討

パウンドの『詩篇』の創作原理である「表意文字的手法」は、異質なテキストの断片の「併置」に基づくが、1930年代以後の詩篇においては、原典の要約を主とする reading-through の手法が顕著になり、「表意文字的手法」のカラージュー的性格は後退する。実際、Chinese History Cantos が de Mailla の *Histoire général de la chine* に依拠するのと同じように、Jefferson Cantos は Lipscomb and Bergh 編の *The Writings of Thomas Jefferson* に基づき、Adams Cantos もまた Charles Francis Adams 編の *The Life and Works of John Adams* の reading-through であると言える。しかし、同時期の詩篇においてパウンドは、自身の政治・経済的信条に沿う内容を持つ断片については、それらを積極的に併置しているように見える。このような例外的な併置の手法は、従来の「異質なものの併置」というよりはむしろ「同質のもの連結」の試みとみなしうる。本研究はこのような「連結」を、同一物の部分であった断片(割符)同士の間接接合を意味する「符合」として捉え、パウンドの「表意文字的手法」の再解釈を試みるとともに、その「符合」の概念は、パウンドの「アメリカ建国の父祖」、ムッソリーニ、儒教の連結の試みとも連動する可能性について考察する。

(3) 先行研究

パウンドの「アメリカ建国の父祖」たちへの関心と彼の儒教、ファシズムへの傾倒との関連性については、まだ十分な研究がなされていないとは言い難い。ジェファソンに関する先行研究は、例えば、Tim Redman, *Ezra Pound and Italian Fascism* (1991)、Leon Surette, *Pound*

in Purgatory: From Economic Radicalism to Anti-Semitism (1999) など、主として、パウンドの政治的見解を論じる研究に見出され、パウンドとアダムズに関する研究には、David Ten Eyck, *Ezra Pound's Adams Cantos* (2012) などがある。しかし、これらの研究は、パウンドの建国の父祖への関心と儒教道徳への傾倒との関連をパウンドの創作原理の変化に照らし合わせて論じるものではなく、また、パウンドの儒教への傾倒との関連についての議論も十分とは言えない。本研究は、パウンドによるジェファソンおよびアダムズとムッソリーニおよび儒教との連結を、彼の「表意文字的手法」の変化に着目して再考し、また、彼の儒教への関心との関連をより深く掘り下げることで、欧米の研究者による従来の研究をさらに深めることを意図したものである。

## 2. 研究の目的

(1) 上述の問題領域を研究対象とする本研究の目的は、主として次の2点である。

Jefferson Cantos と Adams Cantos を中心とする、主として1930年代執筆の「詩篇」と同時代の評論・書簡に見出される、パウンドの「アメリカ建国の父祖」たちへの関心と、彼の儒教、ファシズムへの傾倒との関連性について検証すること、パウンドの詩作品と評論に見出される「割符」についての議論について検討し、その概念を軸に、1930年代以後の『詩篇』における「表意文字的手法」の性格の変化と、「アメリカ建国の父祖」、ムッソリーニ、儒教の連結の試みについて考察すること、である。

(2) より広い見地に立てば、これらの目的は、アメリカのモダニズム詩一般に窺われる同時代的な美学原理（「抽象」および「併置」を鍵語とするもの）への関心とその変化を性格付け、またその美学原理が彼らの歴史・経済的関心と連動することを明らかにするという、より包括的な研究目的の一部である。

## 3. 研究の方法

(1) 本研究は主として文献調査により遂行した。具体的には、パウンドの評論、詩作品および書簡を対象に文献調査を行い、彼の「アメリカ建国の父祖」たちへの関心と儒教、ファシズムへの傾倒との関連性について検証する、同様の文献調査に基づき、彼の「割符」についての議論と、後期の『詩篇』における「表意文字的手法」の変化との関連について検証する、というのが本研究の研究方法である。

(2) 文献調査において対象にした主たる文献は次の通りである。

ジェファソン、アダムズら「建国の父祖」に焦点を当てた「詩篇」(Eleven New Cantos 収録の「ジェファソン詩篇」、Cantos LII-LXXI 収録の「アダムズ詩篇」、儒教的価値観を反映

する「中国詩篇」(Cantos LII-LXXI 収録)『削岩機篇』(Section: Rock Drill de los Cantares LXXXV-XCV)および『玉座詩篇』(Thrones de los Cantares XCVI-XCIX)中の中国関連詩篇、

主として1930年代に書かれた、「建国の父祖」、儒教、ファシズムの関連を示すパウンドの評論(Jefferson and/or Mussolini, “The Jefferson-Adams Letters as a Shrine and a Monument”, “Immediate Need of Confucianism”, “Mencius”, Guide to Kulchur など)、「ジェファソン詩篇」、「アダムズ詩篇」執筆の際にパウンドが依拠した *The Writings of Thomas Jefferson*, *The Life and Works of John Adams* 等のソース・テキスト、である。

(3) 上記文献調査を補完するために、イェール大学パイネキー図書館にて、パウンドの自筆原稿の調査を行った。

## 4. 研究成果

(1) 研究の結果、パウンドの「アメリカ建国の父祖」たちへの関心と、彼の儒教、ファシズムへの傾倒との関連について、また、彼の「割符」についての議論と、後期「詩篇」における「表意文字的手法」の変化との関連について、次の知見を得た。

パウンドはワシントン、アダムズ、ジェファソンら「アメリカ建国の父祖」たちを、主としてアメリカの経済システムの歴史の観点から考察している。とりわけ、彼が生涯にわたって告発した不正な利潤獲得(“Usury”の言葉で表された)を妨げる制度の確立との関連において、これらの政治家たちについて考察した。彼は同様の視点からムッソリーニについての評価も行っており、*Jefferson and/or Mussolini* ほかの論考に見られる通り、両者の評価は連動している。一方、儒教との関連については、「中国詩篇」などに、清朝における儒教に基づく統治とムッソリーニの政治との関連性を示すくだりが見出され、また、「建国の父祖」との関連については、評論において、「誠実さ」の観点からワシントンと康熙帝とを結びつける例などが見出される。

パウンドは『孟子』に現れる「割符」の比喩に再三言及しており、『詩篇』においても、第77篇、82篇で取り上げている。パウンドの『詩篇』は、1930年代後半から、あるテキストからの抜粋を順に並べていく reading-through の手法が顕著になり、コラージュ性が希薄になるが、それに伴い、後期の「詩篇」では、異質なものを並べて新たな情緒や考えを生み出すというよりは、思想上同質のものを結ぶ傾向が強くなる。詩篇における「割符」への言及はこの変化を裏付けるものと考えられる。また、この「割符」概念は、パウンドの「アメリカ建国の父祖」、ムッソリーニ、儒教の連結の試みを説明する原理としても有益である。

これらの研究成果については、さらに検討を進め、論文にまとめて発表する計画である。

(2) これらに加え、1930年代以後のパウンドの活動に関して、また、パウンドの詩作一般に関して、次の知見を得た。

パウンドの後期の詩作スタイルに、フェノロサ草稿に基づく翻訳の影響があることは以前の研究において指摘したが、その影響は、19世紀アメリカの外国語教育において用いられた gloss translation の応用として解釈できること（〔学会発表 7〕にて発表）。

パウンドの「中国詩篇」には儒教的世界観が反映されているが、「詩篇 60 篇」に見られる康熙帝の外征の描写には、これを逸脱する可能性があること（〔学会発表 4〕にて発表）。

(3) 本研究によって、パウンドの「アメリカ建国の父祖」たちへの関心と、彼の儒教、ファシズムへの傾倒との関連性について、また、彼の「割符」についての議論と、後期の『詩篇』における「表意文字的手法」の変化、ならびに、異なる政治家・政治哲学を連結しようとする試みとの関係を検証するという2点の研究目的は—とりわけ前者については問題の大きさゆえに不十分な点が残るもの—おおむね達成されたものとする。今後、補足的な調査を踏まえた上で、本研究の成果を論文・口頭発表の形で発表していく計画である。一方、パウンドの詩作と翻訳の関係について、また、パウンドの詩に見られる辺境意識の変遷についてなど、本研究によって、新たな研究の発展の可能性が生まれた。これらの点については、さらなる研究を行い、その成果を論文・口頭発表の形で発表していく計画である。

パウンドの「アメリカ建国の父祖たち」への関心は、彼の経済論、政治論と連動する重要なトピックであるが、それらを中国を中心とする彼の東アジアの歴史・文化への関心との関係のもとに考察する研究は、今後さらに発展させていく必要がある。それにより、アメリカのモダニズム詩人と革新的表現方法に関する研究をさらに進展させることができるはずである。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(計 4 件)

1) Nagahata, Akitoshi, “The Reception of Ezra Pound and T. S. Eliot in Prewar Japan”, *Oxford Research Encyclopedia of Literature*, Oxford University Press, March 2018, Online. DOI: 10.1093/acrefore/9780190201098.013.209、査読あり。

2) 長畑明利, 「「痩せた男のバラッド」—ボブ・ディランの歌詞の魅力」、『學士會会報』、925、2017、62-66、査読なし。

3) 長畑明利, 「アジア系詩人による言語実験の評価について—Timothy Yu の考察を手がかりに」、*AALA Journal*、22、2017、1-8、査

読なし。

4) 長畑明利, 「詩篇 59 篇」、*Ezra Pound Review*、18、2016、73-82、査読あり。

〔学会発表〕(計 11 件)

1) 長畑明利, 「ボブ・ディランとエスニシテイ—1970年代～80年代前半を中心に」(招待講演)、神戸・ユダヤ文化研究会、2018年3月31日、兵庫県私学会館。

2) Nagahata, Akitoshi, “Reading Poetry in a Japanese EFL Classroom, or What Does It Mean to Read Poetry in a Foreign Language?”, *Anglo-American Literature/Culture and Education*, 2018年3月17日、名古屋大学。

3) 長畑明利, 「Post-Truth vs. 「言語詩」」、シンポジウム「Pound, Politics, Post-Truth」、日本エズラ・パウンド協会大会、2017年11月4日、椋山女学園大学。

4) Nagahata, Akitoshi, “Gloss Translation and The Cantos”, The 27th Ezra Pound International Conference, 2017年6月22日、ペンシルヴェニア大学。

5) 長畑明利, 「前衛詩と bad poetry—詩の「善し悪し」を超えて」、シンポジウム「詩の善し悪し—西洋古典から英米まで」、日本英文学会全国大会、2017年5月20日、静岡大学。

6) 長畑明利, 「アジア系詩人による言語実験の評価について」、シンポジウム「ポストモダニズムとアジア系アメリカ文学」、第24回 AALA フォーラム、2016年9月24日、神戸大学。

7) Nagahata, Akitoshi, “Mobility and Speed in Mina Loy’s ‘Anglo-Mongrels and the Rose’”, ‘Mobility’ and North American Literature/Culture, 2016年3月21日、名古屋大学。

8) Nagahata, Akitoshi, “‘Pasturage excellent’: Emperor Kangxi’s Description of the Mongolian Land in ‘Canto 60’”, The 26th Ezra Pound International Conference, 2015年7月9日、Brunnenburg Castle (Dorf Tirol, Italy)。

9) 長畑明利, 「移動と停止のモダニズム—ミナ・ロイを中心に」(招待講演)、九州アメリカ文学学会大会、2015年5月9日、鹿児島大学。

10) Nagahata, Akitoshi, “Rosmarie Waldrop’s *A Key into the Language of America* as a Cultural Translation”, The 3rd Convention of the Chinese/American Association for Poetry and Poetics, 2014年12月19日、上海師範大学。

11) 長畑明利, 「Roger Williams, *A Key into the Language of America* (1643) から Rosmarie Waldrop, *A Key into the Language of America* (1994) へ—翻訳と反復について考える」、日本アメリカ文学会中部支部例会、2014年6月21日、椋山女学園大学。

〔図書〕(計 4 件)

1) 早瀬博範、長畑明利、ほか 18 名、『21世紀から見るアメリカ文学史—アメリカニズムの変容(改訂版)』(英宝社、2018)(共著)

[早瀬博範編]。

2) 松本悠子 (編集委員長)、長畑明利、ほか 4 名 (編集幹事)、『アメリカ文化事典』(丸善出版、2018)(共著)[アメリカ学会編]。

3) 原田範行、長畑明利、ほか 29 名、『教室の英文学』(研究社、2017)(共著)[日本英文学会(関東支部)編]

4) 藤平育子、長畑明利、ほか 16 名、『抵抗することば—暴力と文学的想像力』(南雲堂、2014)(共著)[藤平育子監修、高尾直知・舌津智之編]

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

長畑 明利 (NAGAHATA, Akitoshi)  
名古屋大学・人文学研究科・教授  
研究者番号：90208041